

国際協力という大きなテーマを身近なものとするために

北海道当別高等学校 田辺孝規

「国際協力」という言葉が一般に使われだしてまだまだ日が浅い。その分「国際交流」や「異文化理解」と混同されて使われることが多い。筆者は現任校で「国際協力クラブ」を立ち上げ7年間にわたり活動してきた。その活動を元にしながら、少しでも授業実践に役立つ内容があれば紹介したい。

多面的な国際協力活動

野球部は野球を、茶道部は茶道を行うのがセオリーだ。しかし国際協力活動とは何かと問われた時、答えは問いの数だけあると言えるだろう。ただし、どんな国際協力活動にも共通して言えることは、相手がいることである。アフガニスタンであればアフガニスタンの人々が、砂漠緑化であれば緑化しなければならない地域がそれぞれ対象にある。そして、それに関わる人々が「笑顔」になれること、それを求めて活動することが国際協力活動であると考えている。

どこに視点を？

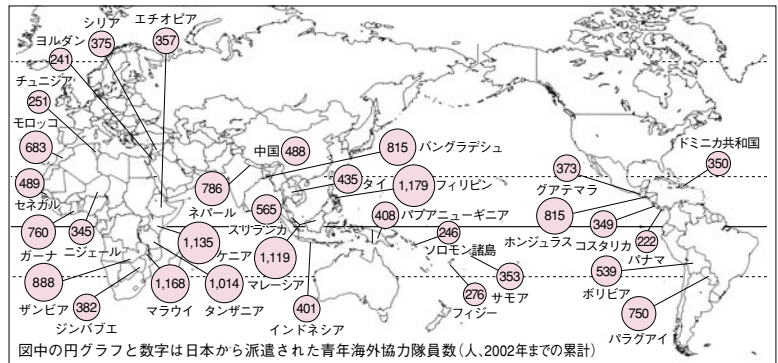
人間誰も興味を持つことができる。それは千差万別である。それでよいのだ、答えはない。いやすべてが答えであるとも言える。木を植えたい人は植林を、お菓子を作りたい人はお菓子作りを、パソコンが得意な人はパソコンをいじることで国際協力になるのである。唯一の条件は「自分のため」ではなく「世界で苦しんでいる人のために」という方向性が絶対の条件である。これがなければただの趣味の世界であろう。

どのように？

様々な活動へのアプローチがあると思うが、大別して3パターンぐらいではないだろうか？ ①

自分で相手を見つけその相手に対しての協力活動。
②NPO組織に対しての協力活動。③ODA組織に対しての協力活動である。

①は文字通り自分のアンテナを高くし、困っている人々、あるいは協力できる内容を見つけコンタクトを取り積極的にアプローチしてゆくやり方である。非常に困難があるものの直接のやり取りは、心の通じる部分がたくさんあることが多い。②は全国・全世界に国際協力NPOが様々な活動をしているので自分の協力できる範囲の内容、方向性を確認して協力してゆくことである。③は、とくに昨年10月に独立行政法人化したJICA（国際協力機構）の行う青年海外協力隊や、日系社会青年ボランティアなどに代表される日本から開発国への派遣事業への協力ならびにその方々を介しての協力活動である。



青年海外協力隊の派遣先(2003年には東欧へも派遣されている)

具体的には？

国際協力NPOも資金・人材・物資・理解の不足に困っている。それを少しでも和らげてあげるだけでそれは国際協力活動となる。資金不足には募金活動が近道である。しかしどれだけ気持ちがあっても募金活動は長続きはしない。しかも生徒

たちは親のスネをかじって学んでいるのである。毎日・毎週募金箱をもった集団が目の前に立っていたら、そのうちだれも通らなくなる、気持ちはあるけれど財布は無限ではない。

発想の転換が命を与える

そこで無から有を生み出す方法がある。ベルマークがそれである。ベルマークはどの子も小学生の時に集めた覚えがあるはずである。しかも高校生ぐらいになると自分でも知らず知らずベルマーク対象商品を買っていることもある。現在ベルマークは1点=1円の計算で募金にすることができる。「友愛援助」がそれである。募金団体は複数あり、自分たちの思いを寄せる団体へ自分たちが集めた分、財布を苦しめなくても募金できるのである。ただし学校PTAが単位であり、窓口となるため連絡調整をしっかりとってからでないとなしがある。

その他にも

お菓子を作りたければ調理室に駆け込んで一所懸命にお菓子を作り、それを校内で販売する。そして益金を作り募金する。花が好きであれば、花を栽培し地域の方々には花を販売し益金を作る。切手やカードを集めることに意識があれば、校内をはじめ近隣の方々にご協力をいただいて回収活動を行いNGOへ寄付する。活動は方向さえ間違えなければすべてに通じている。何でも国際協力に通じるのだと思う。

1本のバナナから

バナナは経済の優等生？ 日本で一番安い果物は輸入品だ。「なぜ安いのだろうか？」そんな問いかけを教室ではいかがだろうか？ 八百屋のおじさんがまけてくれている。輸入商社がまけてくれている。どれも生徒は納得しないだろう。体で感じるのである。1本10円程で安売りされるバナナの損をかぶっているのは紛れもなくフィリピンのプランテーションで働き続ける農民である。安い賃金で雇われ、安いために生活できず、さらに借金を重ね、借金を返すためにさらに借金をし

てゆく、一生をプランテーションで暮らす彼らは農奴のようである。また日本人の「きれいなバナナ好き」によって農薬汚染で皮膚病に罹る農民たちの苦しむ現状がバナナから見えてくれば「生きた地理」となるであろう。フィリピンの農民の生活向上をめざすにはどうしたらよいのだろうか？ 生徒に問いかける「買わないこと！」=プランテーション作物が暴落を起しさらに飢える。「たくさん買うこと！」=たくさん売れてもうかるのは輸出業者だけ。決して農民にはもうけは回らない。近年フェアトレードという表現が盛んに使われた。北の豊かさを南にも公平に渡すため、買い叩かないで苦労した分の対価を払う。この活動を支援すると購入者も生産者も安心して暮らすことができるのである。今年、無農薬フェアトレードバナナのNPOを知り、校内販売を始めた。

最後は自分自身の問題

「知り」「考え」「行動する」が順番にできれば、どの方法も中身は大して変わらない。本質は何なのか様々な角度で調べることによって「知ること」、そしてその内容を自分なりに解釈し「考えること」、最後にその内容をもとに何かしら「行動すること」、それが一番大切である。人に伝えること、それも立派なアクションである。そこから何かが始まる。私たちの仕事はそんな生徒を一人でも多く育て世に出すことではないだろうか。一般的に高校生は保守的でなかなか自分を出そうとせず、考えないと思込み勝ちであるが、えてしてそれは教員側の思い込みであって、きちんと筋道を立てて調べさせ、考えさせてゆけば、生徒は方向性を模索しながらも何が一番大切かを探り始める。インターネットの普及や様々なテレビ番組など「ソフト」の内容は豊富にあれども、それをどのように生かすのかは「ハード」であり「ハート」の問題である。そんな生徒作りを私たちはしてゆかなければならない。技術者としてドクターとして、だからこそ我々が一番アンテナを伸ばし、磨かなければならない。